

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅶ

1991年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1992年3月

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅶ

1991年度

立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

1992年3月

序

靈峰立山の山麓に広がる立山町は、古くより人々の生活の場として、また立山禪定に代表される信仰の場として、数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中で、これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していこうとしています。

町ではこの事態を重視し、かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが、真の地域社会の発展へとつながるものであるとする観点から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され、文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施及び報告書作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

立山町教育委員会

教育長 金川正盛

例　　言

- 1 本書は、立山町教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第7年度（1991年度）の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成してこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、立山町教育委員会社会教育課三鍋秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力して、おこなった。
- 4 本文は、宇野隆夫（富山大学人文学部助教授）、前川要（富山大学人文学部講師）三鍋秀典、片岡英子、河合君近、鈴木和子、浜木さおり、宮沢京子、森田知香子、角田隆志（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。
- 5 参考文献は本文末に一括し、通し番号を付して示した。
- 6 遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し実測図と写真的番号を統一している。
- 7 編集は宇野隆夫、前川要と三鍋秀典が協力しておこなった。
- 8 本書の作成にあたっては、調査団顧問の岡崎卯一氏、同安田良榮氏をはじめとする多くの方々から貴重な御教示を受けた。深く感謝して御礼申し上げる。

目 次

第 1 章 はじめに	1
1 調査の目的	1
2 調査の経過	1
3 立山町の地勢と自然環境	2
4 1991年度調査地区の地勢と地区割	6
第 2 章 分布調査の成果	7
1 遺跡と採集遺物	7
(1) 西大森遺跡	7
(2) 三ツ塚遺跡	7
(3) 泊新遺跡	8
(4) 中諸見坂遺跡	8
(5) 岩崎野遺跡	8
(6) その他の採集遺物	9
2 遺物の散布状態	9
(1) 縄文時代遺物の散布状態 ..	9
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態 ..	9
(3) 古代遺物の散布状態	16
(4) 中世遺物の散布状態	16
(5) 近世遺物の散布状態	16
第 3 章 おわりに	17
参考文献	19

図版目次

関連頁

図版 1	VII地区航空写真(1)	1953年撮影.....	1 ~ 6
図版 2	VII地区航空写真(2)	1961年撮影.....	1 ~ 6
図版 3	VII地区航空写真(3)	1990年撮影.....	1 ~ 6
図版 4	遺物実測図	片岡・河合・鈴木・浜木・宮沢・森田・角田製圖.....	7 ~ 9
図版 5	遺物写真	宇野・片岡・浜木・森田撮影.....	7 ~ 9
図版 6	VII地区的遺跡と遺物採集地点	鈴木作成.....	9 ~ 16

插図目次

第1図	立山町の気候・植物帯の垂直変化	『立山町史』から.....	2
第2図	立山町西部の地勢	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	3
第3図	VII地区図	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	4
第4図	VII地区的地区割り	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	5
第5図	VII地区的地区名	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	10
第6図	VII地区縄文時代遺物の散布状態	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	11
第7図	VII地区弥生・古墳時代の散布状態	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	12
第8図	VII地区古代遺物の散布状態	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	13
第9図	VII地区中世遺物の散布状態	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	14
第10図	VII地区近世遺物の散布状態	片岡・河合・鈴木・角田作成.....	15

第1章 はじめに

1 調査の目的

立山町が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、吉峰台地においてである。以後、旧石器（先土器）・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上、弥生時代は町北部のデルタ地帯、古墳時代以降は町中央部の扇状地というように、その生活の場は時代により変化してきているが、現在に至るまで連續と人びとの営みが続いている。¹⁻⁹

従って遺跡も多数存在しており、1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』においては63箇所の遺跡が登録されている。そして、その後発見された遺跡も多く、未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い、遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2 調査の経過

以上の理由により、立山町教育委員会では、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査をおこなうことになった。

1985年（昭和60年）3月27日に、町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果、町教育委員会を中心とした調査団を編成し、元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することとなった。

調査の方針としては、町域の中でも遺跡分布密度の濃い、町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし、5ヶ年計画とすること、年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表、及び主要遺跡解説等を、含む報告書を刊行することが決定された。

その後、1989年（平成元年）に、町教育委員会と富山大学考古学研究室とで再度の会合がもたれ、町の平野部全体を対象地域に含め、調査を4年間延長して9ヶ年計画で実施すること等が決定された。

今年度の現地調査は、第Ⅶ地区について（第2図）、1991年10月20日～11月10日までの間、計8日間、延120人余の参加を得て実施した。

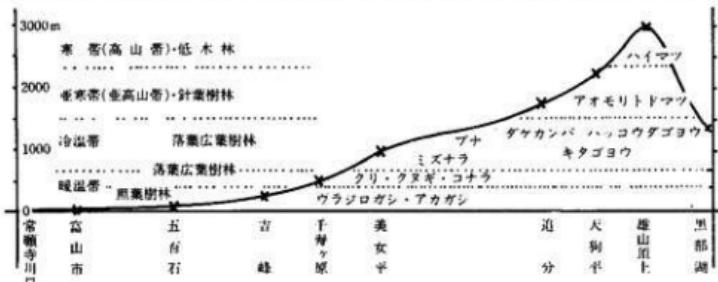
立山町埋蔵文化財分布調査団

団長 金川 正盛 立山町教育委員会教育長
 顧問 岡崎 卵一 元立山町史編纂主任
 安田 良栄 立山町文化財保護審議委員
 調査員 宇野 隆夫 富山大学人文学部助教授（調査主任）
 前川 妻 富山大学人文学部専任講師（調査副主任）
 三鍋 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事
 調査補助員 亀井 駿（富山大学大学院人文学科研究科学生）
 笹川 修一、榎木 和代、葛山 拓也、高橋 浩二、谷杉 延子、向山 静子
 野村祐一、片岡 英子、河合 君近、鈴木 和子、浜木さおり、宮沢 京子
 森田知香子、角田 隆志、大知 正枝、大野 淳也、小野木 学、海造 順子
 柳原 淳高、島崎 久恵、中村 大介、野川 栄二、長谷川幸志、松田 留美
 松山 温代、官田 明、柳沼 弥生、龍華 徽也
 《以上 富山大学人文学部考古学研究室学生）
 事務局 関上 寛 立山町教育委員会社会教育課長
 佐伯 外宣 立山町教育委員会社会教育課庶務・文化振興係長
 松井 君子 立山町教育委員会社会教育課主任
 三鍋 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事

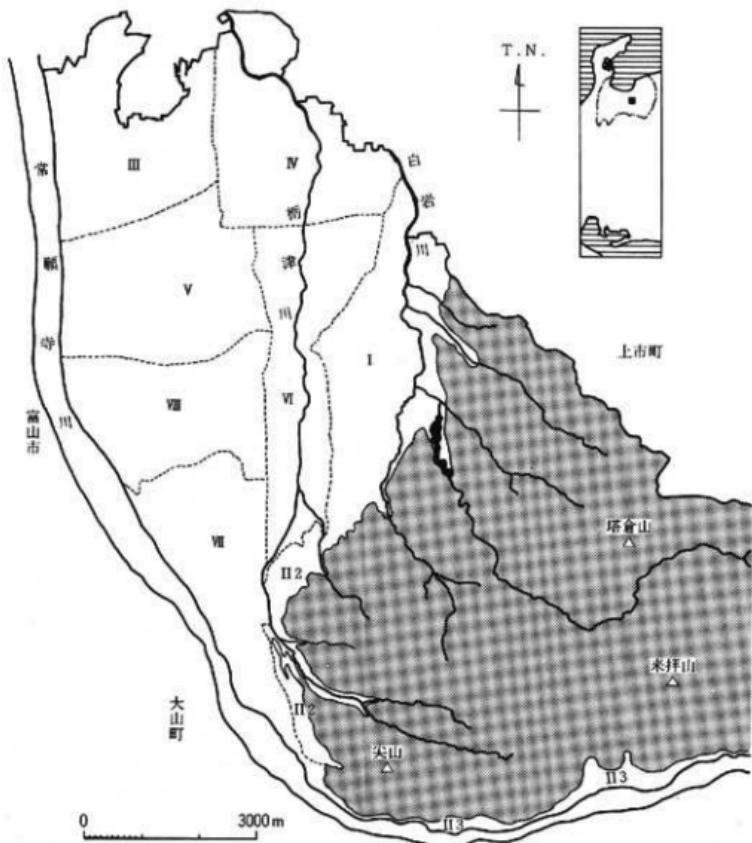
3 立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川に沿って、細長く伸びた町である。西は県の中心である富山市に、東は後立山連峰で長野県と接し、東西約43km、南北約21km、面積308km²を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川によって形成された



第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化（『立山町史』から）



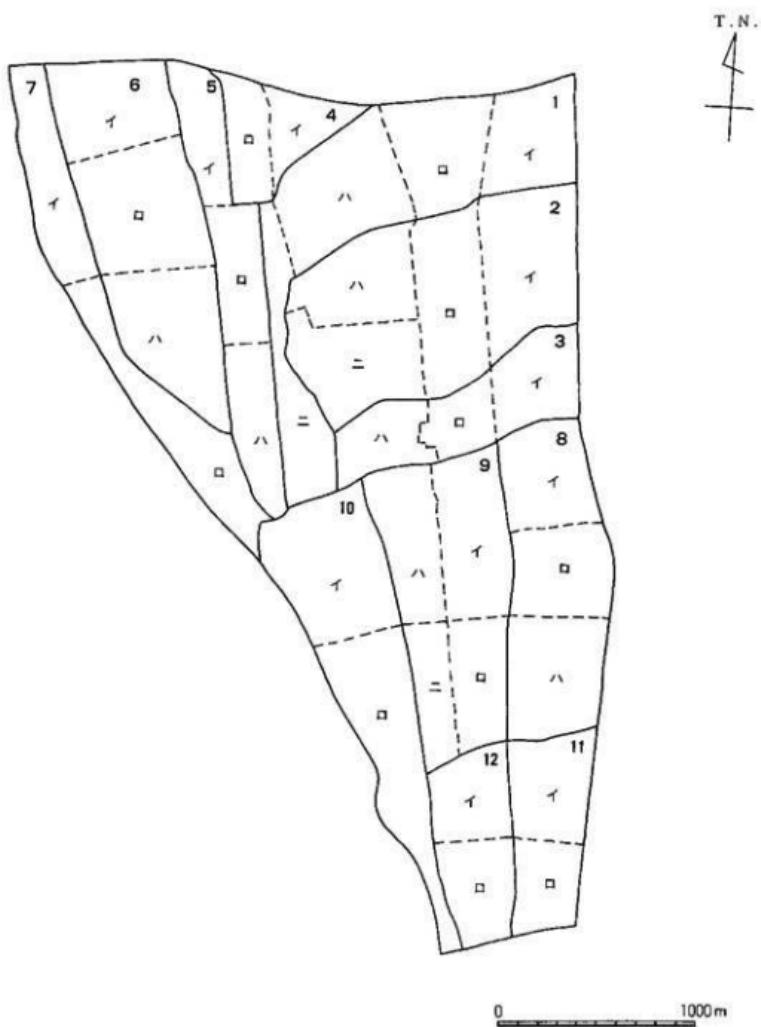
第2図 立山町西部の地勢（VI地区が1991年度調査、縮尺1/100,000）

三角州（デルタ）地帯があり、その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に延び、扇頂部の岩崎寺から上流の千寿ヶ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる（第2図）。この河岸段丘の後背地には丘陵があり、さらに標高3,000mの山脈へと続く。これが立山連峰であり、ここには氷河地形の圓谷（カール）や、火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ、後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため、町域には照葉樹林帯、落葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯という多様な植物帯が成育し、それに伴う複雑な動物相も存在する（第1図）。



第3図 VII地区図



第4図 蒜地区的地区割

4 1991年度の地勢と地区割

本年度の調査地区は、立山町の西南部、西大森、東大森、大清水、河原本地区から岩崎野地区に至る地域であり、北を立山中部広域農道、南を主要地方道立山・山田線、東を富山地方鉄道立山線、西を常願寺川に限られる。

本地区は常願寺川と柄津川に挟まれた複合扇状地において最も高位の部分に当り、標高は約90~180mである。また調査地区的西端は、常願寺川の氾濫原である。

従来この地区では、扇端部や河岸段丘とは異なって、縄文時代の2遺跡の存在が知られていただけであり、遺跡の実態はほとんど判っていなかった。しかし当地区の南に接しては、雄山神社前立社壇が鎮座し、本調査地区には常願寺川に沿って、立山への表参道が通っていたと考えられる。そしてこの地域は現在、大河川である常願寺川の川岸近くまで集落が分布し、また広大な平地部も宅地以外はほとんどが水田として開発されている。

富山県においては四大河川が北流し、本地区のように土壤に砂礫が多く、地下水位が低く、用水の便が悪く、水も冷たいため、農業開発が難しい地域が多い。その中でも本年度調査地区は、開発には最も難しい条件をもつものである。ただし、近世・近代においては、低地部よりもむしろ、このような地区に広大な耕地や中心的な集落が形成される傾向がある。

立山町全体の歴史を考えるためにには、本年度調査地区のような地形における遺跡の実態を把握することも非常に重要な意味をもっていることを認識して、分布調査を実施したものである。

調査は、全体を地形・水路・道路などによって12地区に大別し、さらに34の小地区に細別して実施した。

(三鍋 秀典)

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物

(1) 西大森遺跡 (図版6の120) 立山町西大森

遺跡は常願寺川扇状地の高位扇状地、常願寺川右岸に立地する。標高は約84m～94mであり、規模は県道遠源寺・水橋線を挟んで東西約400m、立山中部広域農道を挟んで南北約500mに及ぶものと推定する。今回の調査で、新たに発見した遺跡である。今回の調査で採集した遺物は、中世の土師器皿2片、近世の器種不明土師器1片、越中瀬戸椀3片・壺1片・匣鉢1片、総計8片である。これらのうち3点を図示した(図版4の1～3)。

1は、土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約10cmを測る。口縁端部は外傾してやや丸みをもつ。体部に指押え、口縁部に撫で調整を施す。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は密で砂粒を少量含む。14世紀頃のものであろう。

2は、土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約10cmを測る。口縁端部はやや鋭く仕上げ、口縁端部に狭く撫でた痕跡がある。色調は灰白色を呈し、胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。15世紀頃のものであろう。

3は、近世の越中瀬戸椀であり、口縁がほぼ直立する形をとるものと思われる。内外面とも、はじめに鬼板を塗り、それから茶褐色に発色する鉄釉を施しているため、一部黒色に発色する。胎土は密で、砂粒をほとんど含まない。

以上、本遺跡は中世・近世にわたる遺跡であり、特に中世の遺物が注目される。なお遺跡は現在遺跡の北部に、天満宮と永昌寺、中心部に信行寺・徳成寺が所在し、その他の地区は宅地、水田として利用されている。
(浜木さおり)

(2) 三ツ塚遺跡 (図版6の121) 立山町三ツ塚

遺跡は、常願寺川右岸の高位扇状地に立地する。標高は114mを測り、規模は東西、南北ともに350mに及ぶと推定される。今回新たに発見された遺跡である。今回採集した遺物は、越中瀬戸椀2片・鉢1片・不明1片、伊万里系椀3片・皿2片・不明3片、近世陶器椀1片の総計13片であり、これらのうち、1点を図示した(図版4の4)。

4は、近世越中瀬戸椀の口縁部破片である。口径は9cmを測り、口縁部残存半は0.7である。内外面に、黒色に発色する鉄釉を施す。胎土は、密で淡黄色を呈す。

以上、本遺跡は近世の遺跡であり、現在まで続くものと推定される。現在は、宅地あるいは水田として利用されている。なお遺跡の南東部には神明社が所在する。

(片岡 英子、河合 君近)

(3) 治新遺跡 (図版6の122) 立山町治新

遺跡は、常願寺川右岸の高位扇状地に立地する。標高は125mを測る。規模は東西、南北ともに約370mに及ぶと推定される。今回新たに発見された遺跡である。今回採集した遺物は、縄文土器1片、越中瀬戸壺1片・椀2片、伊万里系1片、土師器型入土製品1点の総計6片であり、このうち1点を図示した(図版3の5)。

5は、土師器型入土製品である。イヌと思われる形を呈している。型入れの際につけられたと考えられる指痕が裏面に認められる。色調は灰黄色を呈する。胎土は密である。

以上、本遺跡は縄文時代の遺物が1点採集され、他の遺物は全て近世のものである。なお、現在は宅地あるいは水田として利用されている。
(鈴木和子、角田隆志)

(4) 中諸見坂遺跡 (図版6の123) 立山町中諸見坂

遺跡は、常願寺川右岸の高位扇状地に位置する。標高は約146mを測る。規模は、東西約275m、南北約310mと推定される。本遺跡は、1971年に圃場整備が行なわれた際発見され、7点の打製石斧が採集された。3.4メートルばかりの狭い範囲内に不規則に散在し、土器片もかなり存在したらしいが、整地とその後の水田耕作によって下部に埋没してしまい、発掘調査はされていない。

今回の調査では遺物を採集することはできなかった。現在は、宅地・水田として利用されている。
(森田知香子)

(5) 岩崎野遺跡 (図版6の124) 立山町岩崎寺字横割

遺跡は、常願寺川右岸の高位扇状地に立地する。富山地方鉄道立山線の西側に立地し、本遺跡から北西約1kmの地点には中諸見坂遺跡が所在する。標高は、約170mを測り、規模は東西約500m、南北約500mに及ぶものと推定する。

本遺跡は1974年に圃場整備が行なわれた際発見され、1975年に富山県教育委員会によって発掘調査が行なわれた²⁻³。その結果、方形の堅穴住居が3軒確認された。遺物としては打製石斧・摩製石斧・石錐・石錘、縄文時代中期末葉から縄文後期初葉を中心とする上器片が出土した。以上、本遺跡は縄文時代中期末葉岩崎野式の標識遺跡であり、現在は水田として利用されている。

採集した遺物は、縄文時代の土器24片、近世の越中瀬戸椀1片、総計25片である。これらのうち6点を図示した(図版4の6~11)。

6は、縄文土器深鉢の口縁部破片であり、外反する。色調は、内面が明黄褐色、外面が明褐色を呈する。

7は、縄文土器深鉢の口縁部破片であり、横走する一条の沈線を施す。色調は、明赤褐色を呈し、胎土に砂粒を少し含む。

8は、縄文土器の口縁部破片であり、色調は、内面が明黄褐色、外面は灰白色を呈する。

9は、縄文土器深鉢の胸部破片であり、外面には横位のL.R.繩紋を施す。色調は明黄褐色を

呈する。

10は、縄文土器の破片で、色調は明黄褐色を呈する。

11は、縄文土器の破片で、色調は内面が褐色、外面が灰褐色を呈する。 (宮沢 京子)

(6) その他の採集遺物 (図版4の12~16)

遺跡として設定した地区以外からの採集品である。

12は縄文土器胸部破片である。横方向に回転させたRLの縄紋を施している。内外面には煤が付着している。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。

13は古代の須恵器壺の肩部破片である。丸みをもつ9~10世紀頃のものである可能性が高い。外面は轆轤回転撫で調整を施しており、内面は剥離している。色調は明青灰色を呈する。胎土は砂粒を少量含む。重量は9.0gを量る。

14は伊万里系染付皿である。口径は15cmを測り、口縁残存率は2.0である。

15は伊万里系染付碗の底部破片である。

16は上師器火鉢である。外面に赤色の顔料を塗り、内面には煤が付着している。近世あるいは近代のものと思われる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。

これら図示した以外の遺跡設定地区外の遺物として、越中瀬戸碗2片・香炉1片・すり鉢1片・不明2片、近世京焼系1片、唐津系すり鉢1片、伊万里系碗2片・皿1片・壺1片、产地不明の近世陶器2片、総計14片が採集された。

(鈴木 和子、河合 君近、角田 隆志、片岡 英子)

2 遺物の散布状態 (第5~10図)

1991年度の調査によって置地地区から、70破片、口縁部1.6個体分の資料を採集した。これらは、縄文時代から近世に至るものであり、従来はほとんど判っていなかった高位扇状地の利用状況を知るための貴重な資料になるものである。

なお、本年度調査地区は常願寺川と橋津川に挟まれた地区であり、扇状地の最も高位の部分にあたり、調査地区的西部に常願寺川の氾濫原を含む。標高は、高位扇状地部分は98m~180mを測り、82mの比高差を有す。氾濫原は標高85m~170mである。

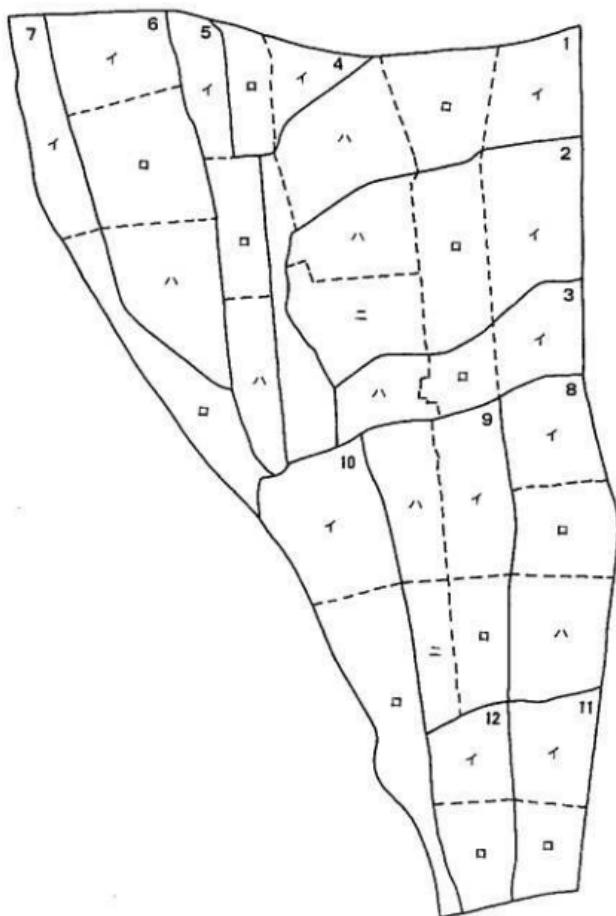
(1) 縄文時代遺物の散布状態 (第6図)

縄文時代の遺物は、土器26片である。小破片が多く、器種・時代を同定できるものは殆どない。34小地区中3地区で採集されたが、11のイ・ロ地区は岩崎野遺跡に集中しており、土器18片はここで採集した。他は扇状地の常願寺川寄りの地区にごく少量散布する。

(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態 (第7図)

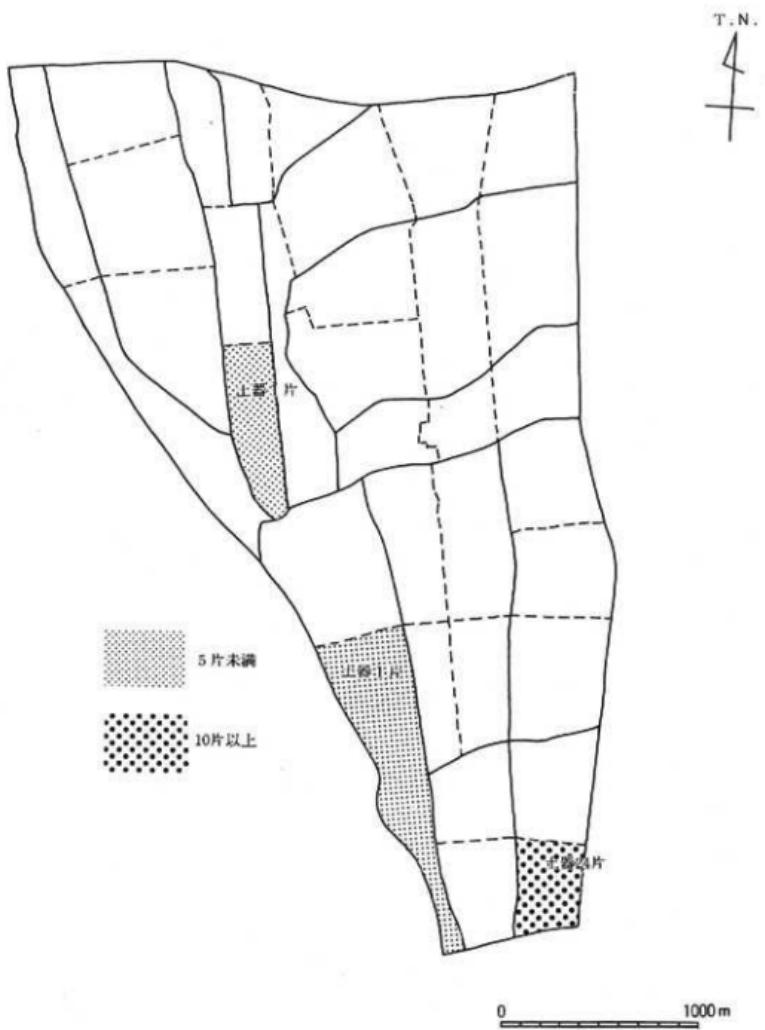
弥生・古墳時代の遺物は、隣接する1990年度調査地区と同様に皆無であった。これは、1987・1988年度に調査した扇端部の調査では、縄文・古代・中世を上回る量の当期の資料を採集できしたことと対照的である。

T.N.



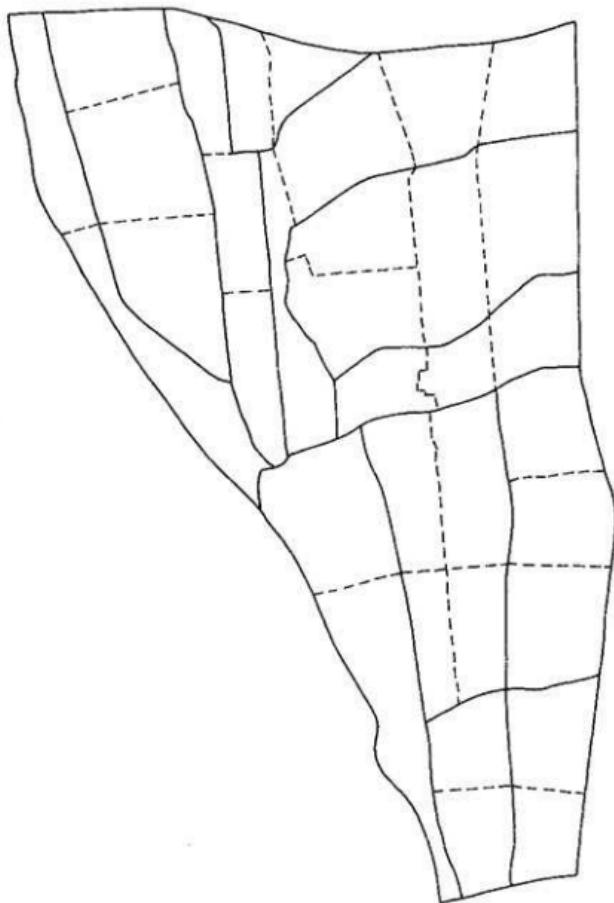
0 1000m

第5図 埼地区的地区名



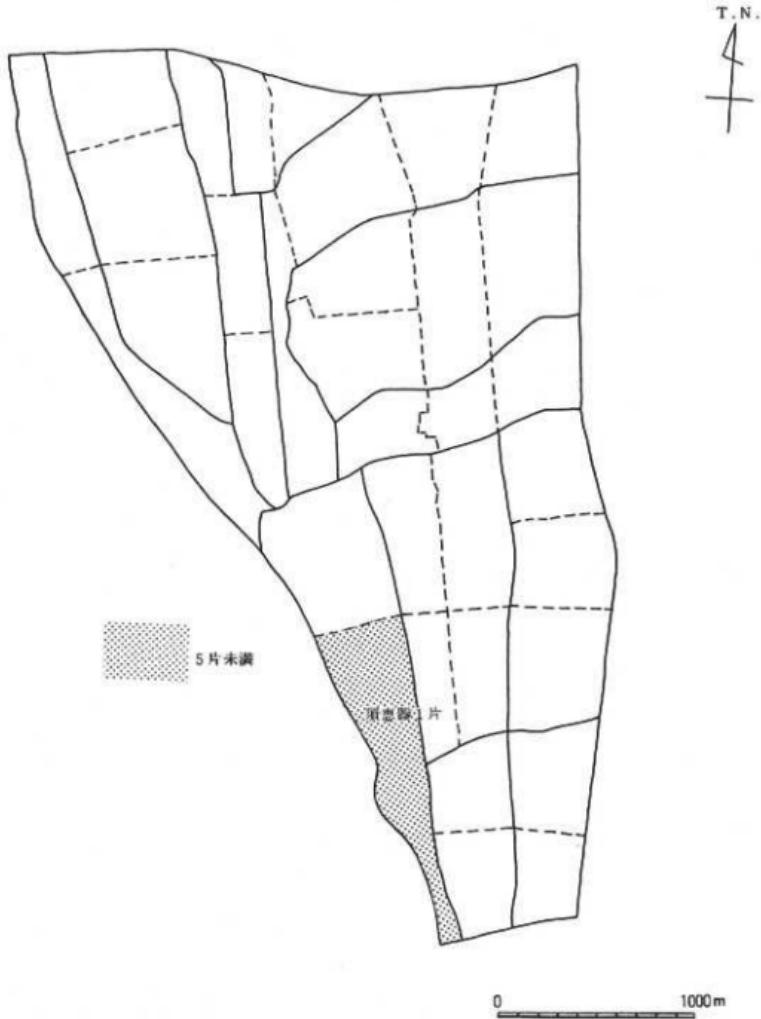
第6図 VII地区縄文時代遺物の散布状態

T.N.
↑

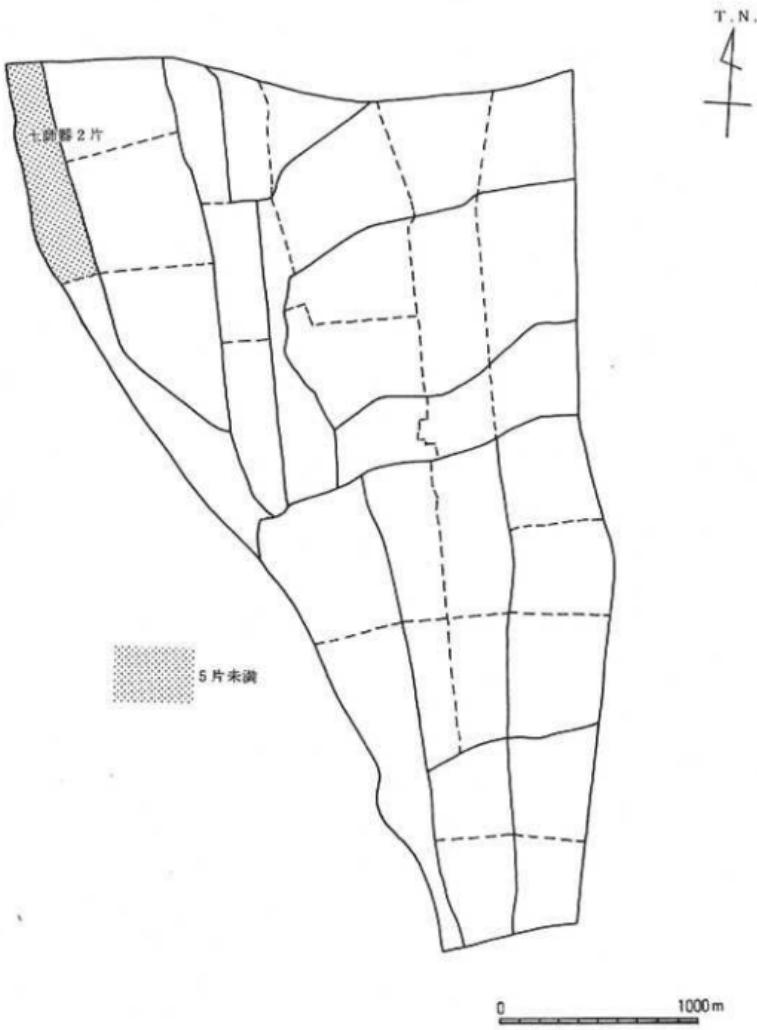


0 1000m

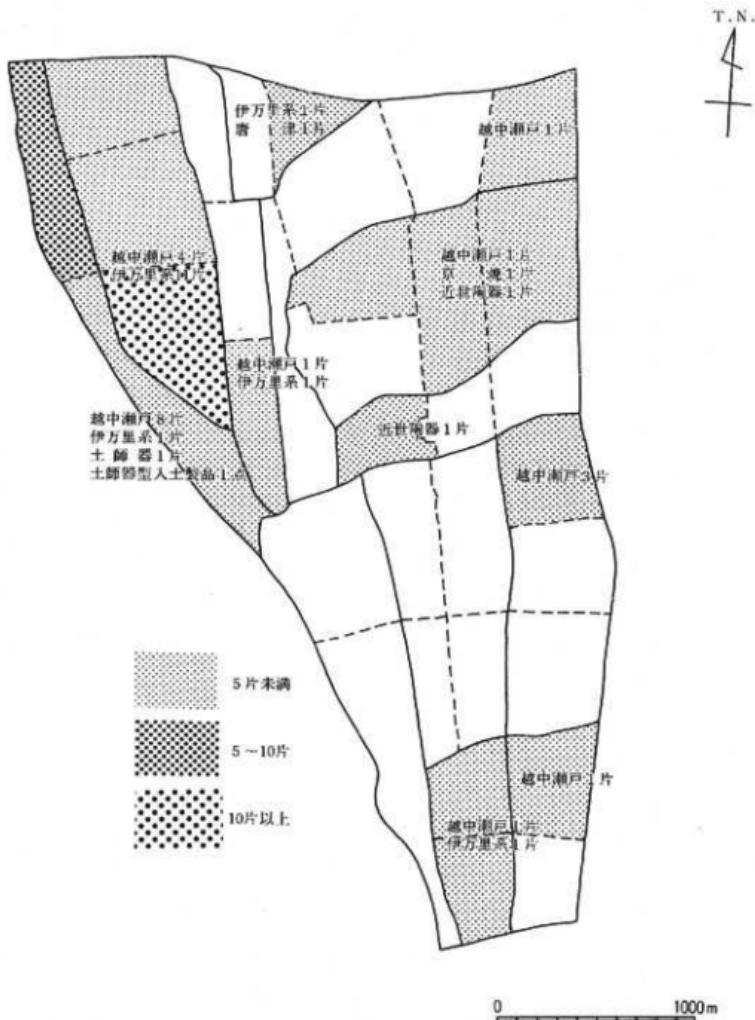
第7図　Y地区弥生・古墳時代遺物の散布状態



第8図 雅地区古代遺物の散布状態



第9図 VII地区中世遺物の散布状態



第10図 雅地区近世遺物の散布状態

(3) 古代遺物の散布状態（第8図）

古代の遺物は1片を10-ロ地区で採集した。須恵器壺の肩部破片である。9~10世紀頃のものである可能性が高い。採集地点は扇状地の標高160mの場所である。従来の調査によって、中・高位の扇状地や河岸段丘における遺物散布の再開は、8世紀前半と9~10世紀の2つの節目があると推定できたが、この点が今後、当地区の再開発を考える重要な問題になるであろう。

(4) 中世遺物の散布状態（第9図）

中世の遺物は2片、口縁部0.1個体分である。2片ともに34小地区中、1地区のみで採集した土師器の皿であり、14~15世紀のものと考えられる。散布の地区は、古代同様扇状地の常願寺川に面した部分であるが、標高は89mと最も低い地点であり、現代も寺社が所在する西大森遺跡の範囲に含まれる。

(5) 近世遺物の散布状態（第10図）

近世の遺物は、41片、口縁部1.5個体分、と従来より相対的に急増する。34小地区中16地区と多くの地区に散布していた。その構成は、越中瀬戸20片、0.3個体分、伊万里系15片、0.2個体分、唐津系1片、京焼系1片、産地不明近世陶器2片、不明土師器1片、土師器型入土製品1点、1個体分である。

遺物は、ほぼ調査地区全体にわたって散布するが、詳細にみると、常願寺川に面した扇状地部分に集中し、現在の各集落とほぼ重なる散布状態を呈している。

(片岡 英子、河合 君近、鈴木 和子、角田 隆志)

第3章 おわりに

1991年度の分布調査によって、70破片・口縁部1.6個体分の遺物を採集し、7個年の採集遺物は総計12553片・220.3個体分となった。また遺跡数は5遺跡を加え124遺跡となった。なお本年度の遺物採集量と設定遺跡数はかなり少ないが、¹²地区は、従来、縄文時代2遺跡の存在が知られていただけの地区であり、分布調査実施の意義という点からみるならば、一定の成果をあげえたと言える。

本年度の調査地区は、標高約90~180mを測る扇状地の高位部分と、大河川である常願寺川の氾濫原である。この地区は、現在はくまなく民家と耕地とが広がっている。そしてこれらの場所は、面積は広大であるが、本格的な開発をおこなうには多大な労働力と技術とが必要であり、それがどのような歴史的過程をへてなされたかを知ることには重要な意味があるであろう。

従来の調査によって、常願寺川扇状地には、縄文時代前期後半以後に少量の遺物が散布するようになることが知られていた。このことは当地区が縄文人にとっては、利用しやすい環境であったことを示し、農耕社会との違いを表わしている。また河岸段丘の縄文遺跡では、大規模集中型の散布であるのに対して、扇状地では小規模分散型であることが多かった。これに対して、本年度調査した岩崎野遺跡は、扇状地の最奥部に位置し、散布がやや集中的な傾向を示していることが注意された。

弥生・古墳時代の遺物は、隣接する中・高位の扇状地と同様に、1点も採集できなかった。今後、当地区に該期の遺跡が発見されても、それほど大規模なものではないと推察する。当地区は基盤が砂礫であり、地下水位は低く、水も冷たく、初期の農業技術では開発が困難であったことがその理由であろう。

古代以後になると、わずかではあるが再び遺物が散布するようになる。その再開発の、開始時期は、扇端部や中位の扇状地ではほぼ7世紀末・8世紀初めの頃であるが、当地区ではこの時期の資料も採集することが出来なかった。弥生時代以後の採集資料では9~10世紀のものと推察する須恵器が最占のものであるが、これを当地区の再開発の一般的傾向として提示できるかどうかが今後の調査の課題となろう。

中世の資料も若干量が採集できることは、9世紀以前とは異なる点である。ただしその採集量はごくわずかであり、大規模な開発がなされたとは推定しにくい状況である。

近世には一転して、扇状地と氾濫原を通じて、広く遺物が散布するようになる。またその遺跡の分布からみて、常願寺川に面した立山の参道に沿って集落が成立し、現在の集落につながるものと考えうる。その活況化は、富山県西部の医王山（白山関係）とは表裏をなす関係にあることから、中世後期・近世の山岳宗教の歴史を考える上でも重要な知見となるものである。

なお近世に遺物が散布しない地区は、立山社が管掌した森であった可能性が高い。1953年に撮影された航空写真では、そのなごりを認めることが出来るが、現在はほとんどが水田となっている。

(宇野 隆夫、前川 要、三鍋 秀典)

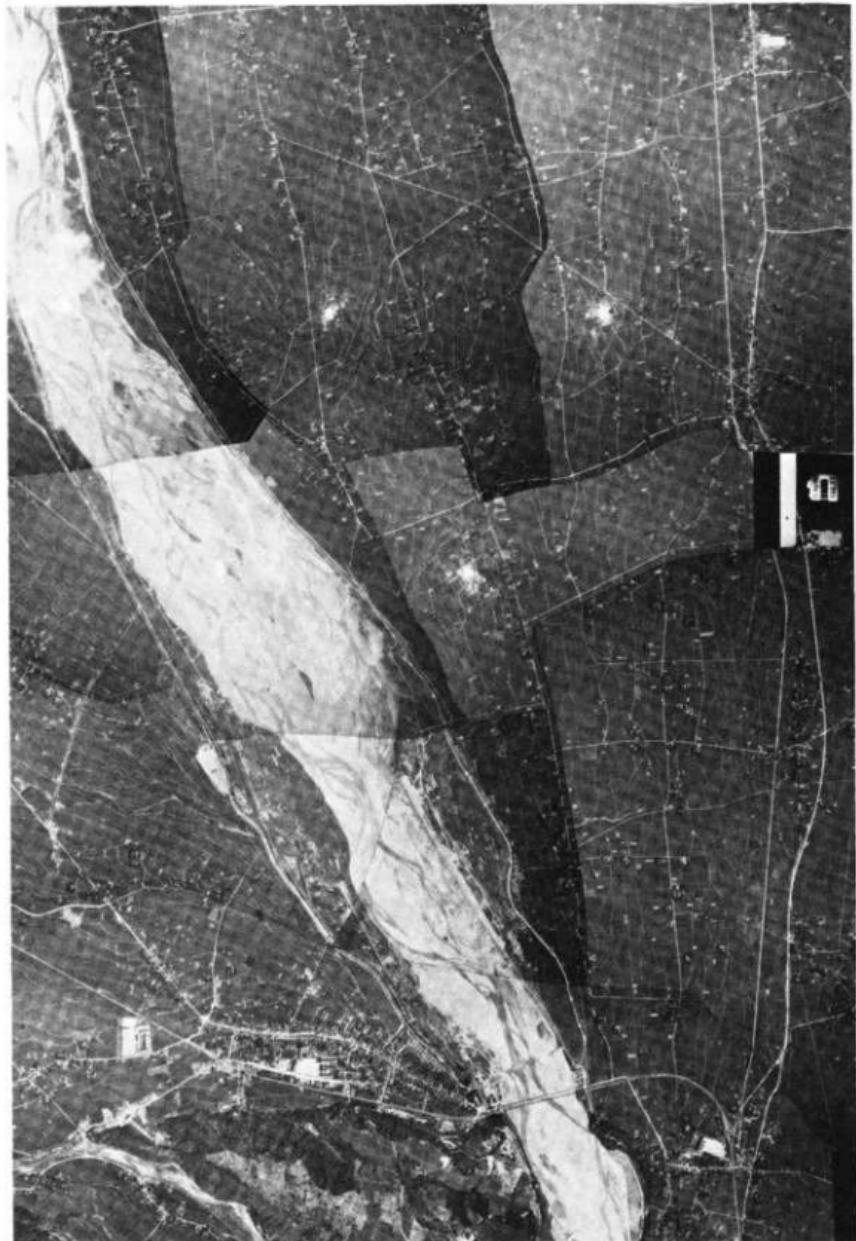
参考文献

- 1 富山県「富山県史」考古編、1972年。
- 2 富山県教育委員会「岩崎野遺跡緊急発掘調査概要」1976年。
- 3 立山町教育委員会「立山町史」上巻、1977年。
- 4 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅰ、立山町文化財調査報告書第1冊、1986年。
- 5 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅱ、立山町文化財調査報告書第2冊、1987年。
- 6 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅲ、立山町文化財調査報告書第5冊、1988年。
- 7 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅳ、立山町文化財調査報告書第8冊、1989年。
- 8 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅴ、立山町文化財調査報告書第10冊、1990年。
- 9 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室「立山町埋蔵文化財分布調査報告」Ⅵ、立山町文化財調査報告書第13冊、1991年。
- 10 小島俊彰「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第5号、1974年。
- 11 南久和「北陸の縄文時代中期の編年他9編」1985年。
- 12 能都町教育委員会「真鶴遺跡」1986年。
- 13 古岡康暢「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』1983年。
- 14 石川考古学研究会「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」資料編・報告編、1988年。
- 15 吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3日本中世、1977年。
- 16 古岡康暢「日本海域の土器・陶磁」中世編、人類史叢書10、1989年。
- 17 宮田進一「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号、1988年。

図 版



(1953年米軍撮影、縮尺約1/25,000)

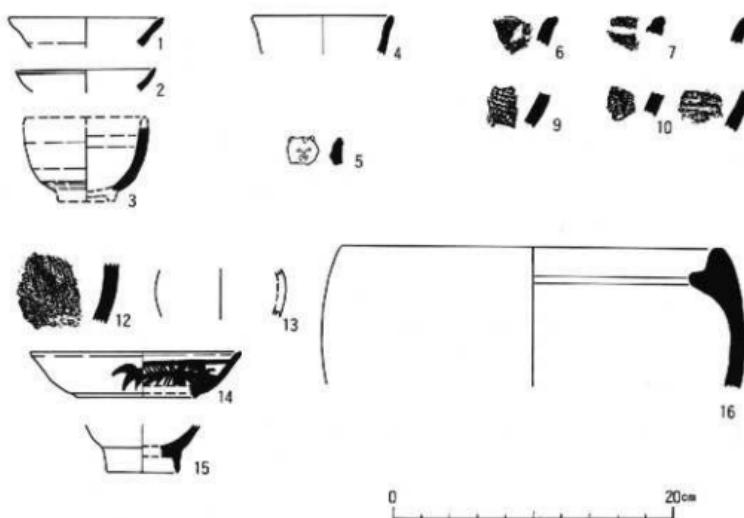


(1961年撮影、縮尺約1/20,000)

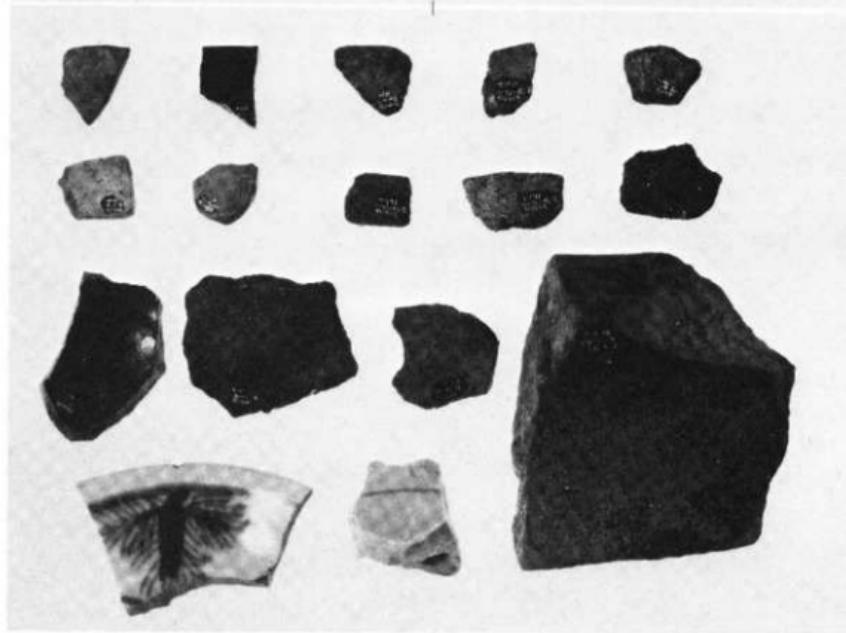
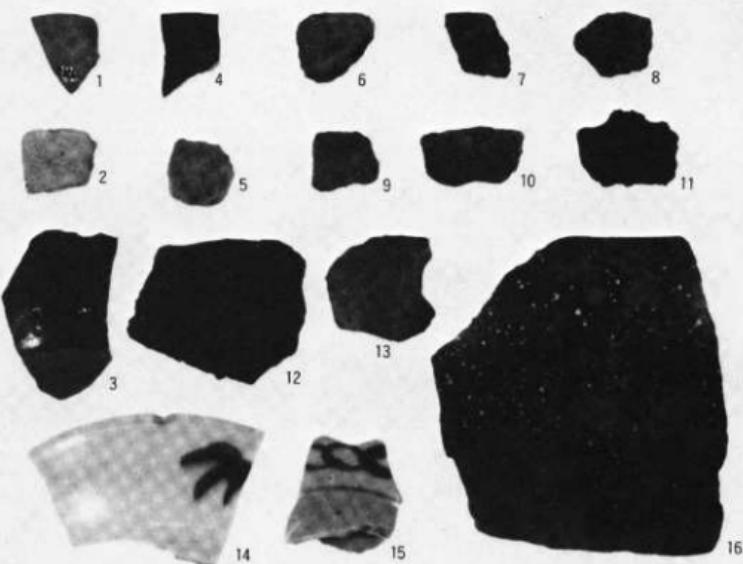


(1990年撮影、縮尺約1/30,000)

図版四 遺物実測図



1～3 西大森遺跡、4 三ツ塚遺跡、5 沖新遺跡、6～11 岩能野遺跡、12～16 設定遺跡外採集品（図版5 参照）



図版六 VII地区の遺跡と遺物採集地点

- ：古文時代
遺物採集地点
- ：古代遺物採集地
点
- ：近世遺物採集地
点
- 120 四大森遺跡
(中・近世)
- 121 三ツ塚遺跡
(近世)
- 122 治新遺跡
(古文・近世)
- 123 中村見収遺跡
(古文)
- 124 岩城野遺跡
(古文・近世)



1992年3月25日 印刷

1992年3月30日 発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅶ

立山町文化財調査報告書第15冊

編集・発行 立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室

印刷 ヨシダ印刷株式会社

